# 試訳 ウルフスタンの*Institutes of Polity*

An Attempt to Translate Wulfstan's *Institutes of Polity* into Japanese

市川　誠
福島工業高等専門学校一般教科
Makoto Ichikawa
Fukushima National College of Technology, Department of General Education

(2013 年 9 月 17 日受理)

Sponsored by the project directed by Professor Akira Kasai, I am preparing for a textbook which would help the students of FNCT know more about the Humanities both in the East and the West. In my view, Wulfstan's *Institutes of Polity* is one of the textbooks which serve the purpose of the project and should be available in Japanese. The purpose of this paper is to present my Japanese translation of *Institutes of Polity*, thus providing the FNCT students with its Japanese version.

**Key Words**: Wulfstan, *Institutes of Polity*, noble obligation, kingly wisdom

## 1. はじめに

現在、筆者は福島工業高等専門学校一般教科笠井哲教授が主導するプロジェクト『高専生の教養不足を解消し、人間性豊かなエンジニアを育むための「文系科目の副読本（『東西における思想と文学』）の作成』に参加している。このプロジェクトの目的は、東西の「思想」や「文学」に関する教養、特に、ラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn) の『生き神様』*A Living God* や、それを翻案した中井常蔵の『稲むらの火』に登場する浜口五兵衛のように、地域共同体が災害などの危機に瀕している時、指導者が知恵を用いてどのように行動するべきかという「ノブレス・オブリージュ」(noblesse oblige) の考えを、将来、社会のさまざまな分野で活躍することを期待される高専生に提供することである。[1] ところで、筆者は西暦 1000 年頃の英語を研究対象としている。古英語期のイングランドの歴史を記録した『アングロ・サクソン年代記』(*The Anglo-Saxon Chronicle*) が伝えるところ、10 世紀終わりから 11 世紀始めのイングランドは動乱の時代だった。8 世紀から始まったヴァイキングの侵略は 991 年に激化した。[2] 1016 年にはイングランド王エゼルレッド(Ethelred) がヴァイキング侵略のさなか亡命地で病没し、デンマーク王スヴェン(Swein)、次いで彼の息子クヌート(Cnut)がイングランド王として即位した。この動乱の時代に、エゼルレッドとクヌートの 2 人に仕えたウスター(Worcester)とヨーク(York) の大司教ウルフスタン(Wulfstan) は、指導者の義務を規定する *Institutes of Polity* を著した。もちろん、ウルフスタンの提示する指導者像は、11 世紀の文脈で捉えるべきであるが、筆者が読む限り、この書物で描かれる指導者の責務は、現代でも十分通じるものであり、現代英語のみならず日本語で広く高専生に提供する価値があるものと思われる。本稿の目的は、古英語版 *Institutes of Polity* を日本語に翻訳し、プロジェクトで将来作成する副読本の一部を作成することである。

## 2. *Institutes of Polity* の著者ウルフスタン

本稿の主題である *Institutes of Polity* の翻訳に入る前に、著者であるウルフスタン(生年不詳-1023 没) について簡単に述べる。ウルフスタンは聖職者だけでなく、古英語文学史上、同時代のエルフリッチ(Ælfric) と共に数多くの説教集を書き残した説教集作家として有名である。[3] 生年不詳の彼は、996 年にロンドンの司教に就任したという記録で歴史上に登場した。その 6 年後に、エアウドルフ(Ealdulf) の後を継ぎ、彼はウスターとヨークの大司教となった。1008 年から 1012 年の期間、彼はイングランド王エゼルレッドの助言者となり、法律を制定した。大司教そして王の助言者として、彼は自ら書いた説教集を通して、ヴァイキングの攻撃により危機に瀕するイングランドの道徳的退廃を防ごうと努めた。以下に引用する文は、ヴァイキングの攻撃が最も激しかった 1014 年にウルフスタンが書いた説教集 *Sermo Lupi ad Anglos*

(『ウルフスタンのアングル族に対する説教』) からの有名な一節である。

An þeodwita wæs on Brytta tidum Gildas hatte. Se awrat be heora misdædum hu hy mid heora synnum swa oferlice swyþe God gegræmedan þæt he let æt nyhstan Engla here heora eard gewinnan & Brytta dugeþe fordon mid ealle. And þæt wæs geworden þæs þe he sæde, þurh ricra reaflac & þurh gitsunge wohgestreona, ðurh leode unlaga & þurh wohdomas, ðurh biscopa asolcennesse & þurh lyðre yrhðe Godes bydela þe soþes geswugedan ealles to gelome & clumedan mid ceaflum þær hy scoldan clypian. Þurh fulne eac folces gælsan & þurh oferfylla & mænigfealde synna heora eard hy forworhtan & selfe hy forwurdan. Ac utan don swa us þearf is, warnian us be swilcan; & soþ is þæt ic secge, wyrsan dæda we witan mid Englum þonne we mid Bryttan ahwar gehyrdan.

(Bethurum pp. 274-5)

ブリトン人の時代にギルダスと呼ばれる歴史家がいた。彼はブリトン人の悪行を書いた。彼らは罪によって神を激怒させ、その結果、神はアングロ・サクソン人に彼らの土地の侵略し、ブリトン人の軍隊を破壊することを許したのである。ギルダスによれば、それは、有力者に対する略奪、不正な財産への熱望、人民の不法、不正な裁判、司教の怠惰、それに加えて、本来堂々と高らかに唱えるべきところを、自信なくボソボソと口ごもってしまった神の使者であるべき者の卑屈な臆病さゆえに招かれてしまったことなのである。また、人々の汚れた放蕩、貪欲、そして多くの罪によって、彼らは自らの国を破壊し、自らを破滅させたのである。しかし、為すべきことを私たちはしよう。そのようなことに警戒をしよう。私が言うことは本当である。私たちは今ブリテン人の間で行われたよりもさらに悪い行為がアングロ・サクソン人の間にあることを知っている。

(筆者訳)

アングロ・サクソン人による侵略をブリトン人による悪行の報いであると説明した 6 世紀の歴史家ギルダスに倣い、ウルフスタンはヴァイギングのイングランド侵略の原因をアングロ・サクソン人の神に対する不信仰に見い出し、自国民に警鐘を鳴らしたのである。彼の警鐘にもかかわらず、イングランドはデーン人に征服され、1016 年、デンマーク王クヌートがイングランド王として即位した。クヌートの即位後、ウルフスタンは彼の顧問官となった。キリスト教徒である新しい王の下、彼はキリスト教を基盤とした新たな法律を制定した。[4] 千年紀終末論の世相が残る中で自国民に不信仰を戒める説教集を書き残したウルフスタンは 1023 年に亡くなった。彼の説教のいくつかは、12世紀後半まで読み継がれた。[5]

## 3. *Institutes of Polity*

Swanton (p.125) によれば、*Institutes of Polity* はウルフスタンの晩年の作品であり、彼の聖職者、王の助言者そして法律家として激動の時代を生き抜いた彼の指導者観が反映されたものである。1023 年に亡くなるまで、彼はこの作品に手を加えて、絶えず修正を施した。この作品は、次の 5 つの写本に現存する。

**Table 1** *Institutes of Polity* を含む写本

a. Cambridge, University Library, Add.3206
b. Cambridge, Corpus Christi College, 201
c. Cambridge, Corpus Christi College, 421
d. London, British Library, Cotton Nero A.1 ff.70-177
e. Oxford, Bodleian Library, Junius 121

この 5 つの写本のうち、London, British Library, Cotton Nero A.1 ff.70-177 はウルフスタンの直筆があることで有名である。[6] この 5 つの写本のテキストを比較することで、ウルフスタンによる作品の修正過程が明らかとなるだろう。

## 4. 試訳 *Institutes of Polity*

以下は *Institutes of Polity* の日本語訳である。筆者が知る限り、この作品を日本語に翻訳する試みはこれまで行われなかった。それ故、この翻訳は、高専生向けの副読本として利用されると同時に、日本の中世英語英文学研究にささやかな貢献を行うものであると思われる。翻訳を行う際、唯一の刊行本である Jost とその現代英語訳である Swanton を底本として使用した。

### 4.1　天上の王について

主の名において。永遠の王、支配者、そしてすべての被造物の創造主がいる。彼はまさしく王であり、王のなかの栄光であり、過去、現在、そして未来においてすべての王のなかで最良である。彼に常に栄光と栄誉が永遠にありますように。アーメン。

### 4.2　地上の王について

キリスト教を信仰する王はキリスト教国家において国民の慰めに、そしてキリスト教徒に対しては正しき牧者とならなければならない。彼は全力でそして熱心にキリスト教を確立し、神の教会をあらゆるところで保護し、正しき法に基づき、できるだけ熱心に、すべてのキリスト教徒に平和と和解をもたらし、あらゆることにおいて、聖俗を問わず、正義を慈しまなければならない。もし、彼が正義を大切にするのなら、彼自身と彼の民は繁栄するだろう。王は正義を求める人を助け、不正を求める人を厳しく罰さなければならない。彼は邪悪な人を世俗の刑罰で厳しく咎め、強盗者を憎み、辱め、神の敵に厳しく抵抗しなければならない。王は正義を以て慈悲深くまた厳格でなければならない。善良な人には慈悲深く、邪悪な人には厳格でなければならない。以上が王の正義、王の責務である。それは国家において特に有益である。

一体どのようにして平和と慰めが神のしもべと神の貧しき人に来るのだろうか？それは、キリストとキリスト教の王を通してである。愚かな王の場合、その指導のまずさにより、国民は一度ならず何度も哀れになる。賢明な王の場合、国民は幸福になり、繁栄し、勝利を得るのである。それゆえ、賢明な王はキリスト教と王権を拡大し、崇め、異教を常に抑圧し、非難しなければならない。王は熱心に書物の教えを聴き、注意深く神の命令を守り、もし神に正しく従うことを望むなら、頻繁に顧問官と共に知恵を巡らせなければならない。もし国内のどこかで誰かが横暴にも守るべき法を守らず、神の法を犯し、世俗の法を妨げるなら、必要ならば、そのことを王に伝えなければならない。そして、彼はすぐさま補償について考えを巡らし、熱心に本来の任務に従事しなければならない。王はもし神の慈悲を得ることを望むのなら、為すべきことをしなければならない。聖俗問わず国家を清らかにし、頻繁に神の法に従い、為すべきこと、為すべきでないことを考えなければならない。そして生前そして死後において、このように彼は名声と尊敬を勝ち得て、神の法を愛し、不正を憎み、自らの善のために、進んで神の教えに何度も耳を傾けなければならない。なぜなら、身体に栄養を取り込まない人はすぐに衰弱し、神聖な栄養を取り込まない人は、すぐに自らの魂を傷つけるのである。しかし、頻繁に神聖な教えに従い、それを守る人は祝福される。

### 4.3　王権について

正当な王権は8つの柱に支えられている。それは、真実、忍耐、寛大、思慮深さ、堅固、援助、節度、そして正義である。次の 7 つが正しき王にふさわしい。1 つ目は、神に対して大きな畏怖を抱くこと。2 つ目は、正義を慈しむこと。3 つ目は、神の前で謙虚であること。4 つ目は、悪に対して決然とすること。5 つ目は、神の貧しき人を慰め、養うこと。6 つ目は、神の教会を援助し、庇護すること。7 つ目は、自国民、外国人に等しく正しき裁きを命じることである。

### 4.4　王座について

まっすぐ立つすべての正当な王座は、3 つの柱に支えられている。1 つ目の柱は祈る人(Oratores)であり、2 つ目の柱は働く人(laboratores)であり、3 つ目の柱は、戦う人(bellatores)である。Oratores とは「祈る人」であり、神に仕え、昼夜、全国民のために執り成しをしなければならない。laboratores とは、「働く人」であり、国民が生きていく糧を供給する人である。bellatores とは、「兵士」であり、武器で戦うことで国を守る人である。キリスト教国家における王座は、この 3 つの柱を基盤としなければならない。もし 3 つの柱のうちの 1 つでも弱くなれば、王座は転がり落ち、国家の損害になるだろう。3 つの柱は固定し、神の賢明な教えと世俗の正義で確固たるものでなければならない。それが国家における永続的な利益となるだろう。私の言うことは本当である。キリスト教の信仰が弱くなれば、王権はすぐさまよろめくだろう。悪法が至る場所で発生し、邪悪な習慣があらゆる場所で崇められれば、全く国家の損害になるだろう。為すべきことをすべきである。不正を倒し、神の法を打ち立てるべきである。それが神と世俗の利益になるだろう。アーメン。

### 4.5　国の顧問官について

王、司教、伯爵、将軍、代官、判事、学者、法律家は、聖俗の事柄において意見を一致させ、神の法を尊重しなければならない。司教は神の法の伝令者また教師であり、彼らは正義を宣べ伝え、不正を禁じなければならない。彼らに耳を傾けることを軽んずる人は、神自身と和解しなければならない。もし司教が罪を罰すること、不正を禁じること、神の法を宣べ伝えることを怠り、本来堂々と高らかに唱えるべきところを、自信なくボソボソと口ごもってしまうなら、沈黙する彼らに災いあれ。預言者は彼らについて話し、次のように言った。「私たちの主は言った「もしあなたが罪人の罪を罰せず、不正を禁じず、悪人の悪を伝えないのなら、あなたは魂に関してその償いを払わなければならない」（エゼキエル書第3章18節）。これはあらゆる司教の心に当てはまることである。司教はこのことを熱心に望むまま考えよ。神の伝令者に正しく従おうとせず、また神の教えを気にも留めようともしない人は、敵に従わなければならない。神の伝令を軽蔑する人は神を軽蔑する人である。そのことについて、キリストは福音書の中で次のように言った。「あなたがたに聞き従う者は、私に聞き従うのであり、あなたがたを拒む者は、私を拒むのである」（ルカによる福音書第10節18章）。もし彼が熱心に不正を禁じようとしないのなら、神の伝令が負うべき責務は重大である。なぜなら、彼自身が善を行っても、他の人が悪事を行い、それを咎めなければ、彼を傷つけるから。神の伝令が悪事を行ったとしても、それに注意を払ってはならない。しかし、もし彼が何が善かを教えるのなら、彼の教えに注意を払わなければならない。ちょうど、キリストが福音書の中で何を為すべきか教えた時のように。「彼らの教えに従い、彼らの罪には従うな」（マタイによる福音書第23章3節）。司教の罪のために怠ることなく、彼が良く教えるように彼の教えに従いなさい。そして、愛する人よ、怒ることなく私が求めるようにしなさい。私が言うことを聞きなさい。私自身言動に大いに罪があることを知っているが、神を恐れるため、私はこの国家を傷つける多くのことについて決して沈黙することはできない。

### 4.6　司教について

司教は書物と祈りに注意を払い、昼夜、何度もキリストに叫び、熱心にキリスト教徒のために執り成しを行わなければならない。彼らは正しく学び教え、民の行いについて熱心に追求しなければならない。彼らは宣べ伝え、注意深く、キリスト教の国民に対して模範を示さなければならない。彼らはあらゆる不正には進んで同意することはせず、正義を熱心に支持しなければならない。彼らは神への畏怖を心に抱き、世間を恐れ、余りに臆病になってはならない。むしろ、望むのなら、神の正しきことを熱心に宣べ伝え、不正を禁じるべきである。なぜなら、守るべき群れを守ろうとしない牧者は、ひとたび敵が略奪を始めると弱くなるだろう。悪魔ほど邪悪な盗人はいない。彼は永遠に一つのことを考えている。人の魂を略奪することである。すると、国家の略奪者から国民を守るべき牧者は、非常に注意深く、熱心に叫ぶのである。司教そして司祭は、思慮のある教えで聖なる群れを守り、その結果、獰猛な狼は、多くの聖なる群れを噛み殺し、貪ることはない。その教えを聴くことを怠る人は、神自らと和解しなさい。

しかしながら、余りに多くの人が書物の命令や司教の教えを無視し、また祝福や呪いを軽視し、キリストが福音書ではっきりと言うことを理解しない。「私たちに聞き従う人は」（ルカによる福音書第10章18節）や、同じく「あなた方が地上で解くことは」（マタイによる福音書第16章19節）や、「あなたがたに許す罪は、誰の罪でも許され」（ヨハネによる福音書第20章23節）や、「確かに他の箇所で書かれている「あなたがたが祝福する人は誰であれ」（民数記第24章9節）や「そして詩篇作者が恐ろしく語り言った「彼は恵むことを喜ばなかった。恵みを彼から遠ざけてください」（詩篇第109章17節）などである。そのようなことを心に留め、神の怒りを常に警戒しなければならない。さて、私たちはあらゆる人に神の教えと法に従うよう熱心に教える。すると、彼は永遠の喜びを得るだろう。

### 4.7　司教について(2)

司教の日常の仕事は、第一に祈り、続いて書物を読み書きし、それを学び教え、それに属する事柄と共に、決められた時間に祈祷を行うことである。また、貧しい人の足を洗い、施しを分け与え、必要な場合、仕事を指示することである。手作業はまた彼にふさわしく、共同体で技能を磨くこともふさわしい。そのため、そこでは誰も怠けることがあってはならない。彼はまた会合で聖なる教えを共にいる民

に教えなければならない。

### 4.8　司教について(3)

知恵と思慮は常に司教にふさわしい。それらに注意を向ける人は、高潔な振る舞いを持ち、また、特別な美徳を持つ。無益なことは司教にふさわしくない。また愚行、飲酒、子供じみた言動や、道化のような行為は、家や旅路またどんな場所であれ、ふさわしくない。しかし、知恵と思慮は彼らの地位にふさわしく、真剣さはそれに注意を払う人にふさわしい。

### 4.9　伯爵について

伯爵、将軍、判事や代官は聖俗問わず正義を尊重しなければならない。また、悪い判断のため、彼らの知恵を金や友情のために無視して、その結果、正義を不正に変えたり、貧しい人を傷つけるような悪法を発布してはならない。しかし、何よりも、彼らは教会を崇め、守り、寡婦や孤児を慰め、もし神の意志を正しく実行することを望むのなら、貧しき人を助け、哀れな奴隷を守らなければならない。彼らは盗人や略奪者や敵を憎み、自らその行為を止めない限り、強盗を非難しなければならない。そして彼らは常に不正を避けなければならない。私の言うことは本当であり、信じる人は信じなさい。不正を行う人に災いあれ。確かに、彼は、助けなく、暗く深い地獄の苦しみの底に沈むことになるだろう。しかし、それを理解する人は少ない。あらゆる友人は為すべきことを行いなさい。自ら戒め、守ることで、神を激怒させず、正しい行いで、主を喜ばせることになるのである。

### 4.10　代官について

代官は熱心に君主のために働かなければならない。しかしエドガー王[7]が亡くなった後、神の意志に従い、正しい人よりも多くの略奪者が現れた。神の民の牧者であるべき人が略奪者であることは残念なことである。時折、彼らは罪のない貧しい人を略奪し、守るべき群れを虐待し、悪口で貧しい人を裏切り、貧しい人の損害に対し、あらゆる方法で不法を制定し、寡婦を何度も略奪するのである。しかし、かつてこの国では、世俗での不名誉と神の恐れのために、欺きを行おうとせず、財産を不正ではなく正当に取得した人が牧者として選ばれた。しかしながら、過酷にも欺き、哀れな人を虚言で傷つけ、無実の人から素早く金を得る人が、牧者の務めを行ってきたのである。この時以来、神は何度も激怒した。不正に富を得る人に災いあれ。彼は聖俗問わずより深い償いを行うのである。

### 4.11　司祭について

自らの司教区で司教は賢明にそして思慮深く守るべき聖なる群れを教え導く。彼らは良く宣べ伝え、他の人に良き模範を示す。そして神の裁きにおいて、彼らは彼らの行為と彼らが守るべき民の行為に対して代償を払わなければならない。もし彼らが何かを行うのなら、彼らは誰かを恐れまたは愛するという理由のために、正しきことを宣べ伝え、不正を禁じることを躊躇してはならない。もし略奪者が略奪を始めても、守るべき群れを守ろうとしない牧者は役に立たないだろう。悪魔ほど悪い略奪者はいない。彼は永遠に一つのことを考えている。人の魂を略奪することである。それゆえ、国家の略奪者から国民を守るべき牧者は、非常に注意深く、熱心に叫ぶのである。司教そして司祭は、思慮のある教えで聖なる群れを守る。もし彼が自らを守るのなら、彼は誰かを恐れまたは愛するという理由のために、何が最も正しいことか言うのを躊躇してはならない。また、謙虚な人や力強い人の前でも躊躇してはならない。というのも、もし彼が何が正しいかを言うのを恐れまたは恥じるのなら、彼は間違いを犯している。もし彼の優柔不断さのために守るべき群れと共に彼が滅びることがあれば、彼は哀れになるだろう。もし私たちの牧者の誰かが一つの群れでも無視すれば、彼はそれに対する代償を払うことになる。キリストが自らの生命で贖い、彼らが守るべき聖なる群れを守ることができず、教養の欠如のため、導き、教え、癒すことができない牧者がどのようにして神の裁きで振る舞うのだろうか？何を以て私たちは彼らが代償を払うことを期待しているのだろうか？確かに、どのようにして盲人は盲人を導くことができるのだろうか？守ることができないことを引き受けた人たちに災いあれ。聖なる群れを引き受け、自らと守るべき群れの世話をできない人たちに災いあれ。さらに、それをすることができるのに、しようとしない人に災いあれ。ああ、ああ、見たところ、司祭の地位を不正に、特に虚栄のためや世俗の富の貪欲さのために望み、知るべきことを知らない多くの人がい

る。「民の罪を食い物にする司祭に災いあれ」（ホセア書第 4 章 8 節）。彼らは民に罪を戒め、罪を罰することをしようとしない、できない、そして敢えてしない人たちである。しかしながら、10 分の 1 税、教会の賦課のために金を欲するのである。彼らは民を模範で立派に導き、説教で立派に教え、懺悔で彼らを癒し、祈りで彼らに執り成しをすることなく、人々の財産から取ることができるものを取るのである。それはちょうど獰猛なカラスが死体にすることと同じである。彼らがすべてを得た後はさらに悪くなる。彼らはすべきことをせず、彼らが祭壇を飾るべきもので女性を飾り、彼らが教会の行為で神の崇拝のために、また、貧しい人の利益のため、また、捕虜の買い取りのため、また彼ら自らまたは彼らに神の恩恵において財産を与える人の永遠の利益になる事を、彼ら自身の世俗の誇り、無益な虚栄に変えてしまうのである。それゆえ、以前は悪いことを行ったとしても、その後に熱心に改める必要がある。できる人は理解せよ。司祭が民の利益のために行わなければならないことは、もし彼が主を正しく宥めることを望むのなら、偉大で素晴らしい。悪魔払いは偉大である。そして、洗礼を行い、聖餐が聖別されるたびに、悪魔を追い払う聖別は素晴らしい。天使はそこで姿を現し、その行為を見守り、神の力を通して、彼らが正しくキリストに仕える度に司祭を助けるのである。そのように、彼らが心からキリストに叫び、民の必要のために執り成しを行う度に、彼らはそのようにするのである。それゆえ、神の恐れのために、人は聖職者に対する敬意を洞察力と共に感じなければならない。

さて、愛する人よ。私たちはすべての人が神に傾斜し、罪を避けるよう熱心に戒め、教えるよう命じられている。神の民、すなわち司教と司祭に正しきことを宣べ伝えるべき人たちについて神が預言者を通して言ったことばは非常に恐ろしい。「大きな声で叫び、ラッパと同じ大きさであなたの声を上げよ。私の民に罪を避けるよう伝えよ」（イザヤ書第 58 章 1 節）。それゆえ、あなたがもし黙ってそれを見過ごし、その責務を民に伝えないのなら、審判の日に、あなたは滅びた魂のために報いを受けなければならない。なぜなら、彼らには必要とする教えや戒めがないからである。このことばが神の民に正しきことを宣べ伝えるべき任務を帯びたすべての人の記憶に留まるように。そして、人々はその後に言われたことばに注意しなければならない。預言者はその後に言った。「もしあなたがたが民に正しきことを宣べ伝え、彼らを正しきことに向けることができなくても、あなたたちは自らの魂を救う」（エゼキエル書第 3 章 19 節）。悪を求めることを止めない人は、永遠の苦しみを受けなければならない。すなわち、彼らは魂と肉体と共に地獄に行き、地獄の苦しみの中で悪魔と共に留まらなければならない。そこで苦しみの中で留まらなければならない人に災いあれ。彼はこの世に存在するよりは存在しないほうが良いだろう。苦しみに完全に転落し、彼が耐えるべきすべての惨めさを語ることができる人はこの世にいない。永遠にそれが来ないことはさらにひどいことであろう。

### 4.12　聖職者について

あらゆる貞節は聖職者にふさわしい。なぜなら、彼らは他の人に不貞を禁じなければならないからである。そしてもし彼らが正しく振る舞えば、彼らは自ら貞節の手本となるのである。すべてのキリスト教徒に宣べ伝え、さらに、模範を示すべき人が、利益ではなく破滅の例となることはおぞましいことである。すなわち、聖職を通して教会と結ばれながら、後にそれを破る姦淫者である。聖職者に妻を娶ることは許されていないのでなく、おのおのに禁じられている。それにもかかわらず、余りに多くの人が、姦淫を犯し、または犯してきた。しかし、神の愛にかけて、それを止めることを私は祈り、命じる。世俗の人には正当な伴侶を除いて女性との交わりは禁じられている。聖職者のなかには悪魔に騙され、不正にも、妻を娶り、姦淫で自らを破滅させるものもいる。しかし、私はそれを止めることを熱心に祈る。教会は司祭の伴侶である。当然、彼にはその他の伴侶はいない。なぜなら、もし彼が神に正しく従い、神の法を彼の地位にふさわしく正しく守ることを望むのなら、妻もこの世の戦いも司祭にはふさわしくないからである。

名高い皇帝コンスタンティヌス[8]はニカイアで公会議を召集し、正しい信仰を確認した。[9] 公会議では380人の司教が多くの国から集まった。そこで彼らは正しい信仰を宣言し、その宣言でミサの信経（使徒信条）を確立した。それは広く歌われている。彼らは教会での儀式、そして、神のしもべと神自らに関する多くのことを適切に規定した。そこで彼らは意見を一致させて、もし聖職者、司教や司祭や助祭が妻を

娶ることを止め、より深く償いをしなければ、彼らが永遠にその地位を剥奪され、破門されることは正しいと言った。三位一体とキリストの人性ついての正しい信仰に関する公会議が4回開催された。初回はニカイアで開催された。二回目の会議はコンスタンティノープルであり、そこに150人の司祭が参加した。[10] 三回目の会議はエフェソスで行われ、200人の司教が参加した。[11] 4回目の会議はカルケドンであり、多くの司教が参加した。[12] 彼らはニカイアで確立されたことに関して意見を一致させ、聖職者に女性との交わりを禁止した。大胆にも、神と4つの公会議およびそれ以降いろいろな場所で多数の聖職者が集って定めた法令を軽んじる人は、彼らへの報いが何であるか考えるがよい。さらに、彼らは想像することなく、邪悪な報いと、彼らが生前に汚れにまみれて過ごした中で、神を非常に激怒させたために招来した神の怒りを確かに知ることとなる。私は聖職者に自らを省み、あらゆる汚れから離れることを懇願する。祭壇ではなく女性を飾った人は、この悪習を止め、できるだけ良く彼らの教会を飾りなさい。そうすれば、彼らは自らに神聖な知恵と世俗の栄誉を得ることとなるだろう。司祭の愛人は悪魔の罠に他ならない。人生の終わりまでにその罠に捕らわれる人は、悪魔によって固く捕らわれるだろう。さらに、彼はその後、悪魔の支配下に落ち、完全に滅びるのである。あらゆる人はできるだけ自らを助けなさい。不正から正しきことに向かいなさい。すると、彼らは永遠の苦しみから免れるのである。さらに、人生の終わりまで善行を続ける人は、それゆえ、永遠の報いを得るだろう。さて、真実をあなたたちに話しました。望む人は自ら理解しなさい。神があなたたち自身の利益のためにあなたたちを強くしますように。そして私たちすべてを神の意志に従い守りますように、アーメン。

### 4.13　修道院長について

修道院長、特に女性の修道院長にとって、絶えず修道院に留まり、常に熱心に会衆に気を配り、彼らに立派な模範を示し、正しく説教を行い、決して、世俗の事柄や虚栄に心を煩わせずに、頻繁に神への務めに従事することが正しいことなのである。そのようなことこそ、修道院長や修道僧にふさわしいのである。

### 4.14　僧について

僧が、昼夜問わず、心から常に神について考え、熱心に彼に叫び、修道院の規則に従い謙虚に暮らし、常にできるだけ注意深く世俗の事柄から距離を置き、彼らの責務を行い、常にどのようにして神の気に入るか気を配り、序階された時に彼らが約束したすべてのことを実行することは正しいことである。さらに熱心に書物と祈りに気を留め、できるだけ良く学び教え、あらゆる高慢と虚栄を完全に軽蔑し、財産と利益をもたらさない行為と分別のない会話を避けることもまた正しいことである。そのようなことが僧にふさわしい。しかし、余りに高慢で、余りにうぬぼれが強く、余りに放浪に委ね、余りに無益で、余りに善行とは無縁で、好色の点で余りに邪悪な人もいる。中身は無価値であるが、外見は憤慨しているのである。修道院の中では神の擁護者であるべき人が背徳者になっている人もいる。すなわち、地位を捨て、世俗の事柄の中で罪に留まる哀れな人である。余りに広くすべてのことが悪くなっている。それだけ一層悪くなっているので、神を恐れるためにかつては儀式と学問において最も有益で最も勤勉な聖職者は今では至るところでほとんど無益になり、聖俗問わず必要な事柄において、決して役に立つことなく、すべてを快楽と安寧、貪欲と虚栄のために行い、ぶらぶらと放浪し、愚行を演じ、しゃべり戯れ、有益なことは全くしない。すなわち、忌まわしい生活をこのように送っているのである。さらに悪いことは、地位が上の者には、それを改めず、ふさわしい振る舞いをしないものもいる。しかし、私たちはできるだけ真剣にそれを改める必要があり、聖俗問わず共通の利益のために、誠実にならなければならない。

### 4.15　尼僧について

僧について述べたように、尼僧が、修道院の規則に従って振る舞い、世俗の男性と接触、面識を持たず、常に修道院の規則に従い暮らし、[13] できるだけ世俗の事柄から距離を置くことは正しいことである。

### 4.16　司祭と尼僧について

司祭または尼僧が、修道院で暮らし、また世間に対して敬意を守ることを望むならば、規則に従って生活し、貞節を守ることは正しい。

### 4.17　世俗の人について

聖職者が、世俗の人に婚姻状態を正しく維持するよう導くことは正しいことである。独身者が正当な妻を娶るまで独身のままでいて、その後、生きている間、彼女だけを妻とすることは正しい生き方である。もし、彼女に死が訪れれば、彼がその後妻帯しないことが最も正しいことである。しかしながら、使徒の許しにより、世俗の人は必要ならば再婚をすることができる。しかし、教会法では、再婚に対して初婚時に行われる祝福は禁じられている。加えて、そのような男性には、懺悔を行うべきことが定められている。男が再婚する場合、司祭は前回と同じように結婚の儀式に参加すること、また、初婚で行う祝福を与えることは禁じられている。そのことから、男性が妻を、女性が夫を二回以上持つことは全く正しいことではないと知られている。3度目の結婚は、明らかに、そして、頻繁な結婚は完全に誤ったことである。世俗の男性には妻帯が許されているが、どのように許されているのか理解しなければならない。世俗の人は祝祭日や断食日には、聖職者がいかなる時にも許されていないように、女性と肉体的な接触を持ってはならない。

### 4.18　寡婦について

寡婦はアンナ[14]の例に熱心に従うことが正しい。彼女は、寺院で昼も夜も熱心に仕えたのであった。彼女は徹底的に断食をし、祈りに聞き従い、うめき声を上げながらキリストに叫び、しばし、施しを分け与え、できる限り、言動において常に神を喜ばせた。そして今や彼女は報酬として天の喜びを得ているのである。そのように、善良な寡婦も彼女の主に従うべきである。

### 4.19　教会について

キリスト教徒がキリスト教を熱心に守り、あらゆる場所でキリストの教会を崇め、庇護することは正しいことである。私たちには、天の父と「エクレジア」、すなわち、神の教会と呼ばれる精神的な母がある。私たちは、それを愛し、崇めなければならない。それぞれの教会が、神とすべてキリスト教徒の庇護にあり、教会の聖域が壁の内部にあり、聖別された王によって捧げられたものにより同じく不可侵であることは正しいことである。なぜなら、あらゆる教会の聖域は、キリスト自身の聖域であり、あらゆるキリスト教徒は、その聖域に対して大きな敬意を払う必要がある。というのも、あらゆるキリスト教徒は熱心に神の教会を愛し、敬意を払い、頻繁にそして熱心に、自らの利益のために、教会を訪問しなければならない。聖職者は、特にそこで仕えなければならない。そして熱心に、すべてのキリスト教徒のために執り成しを行わなければならない。聖職者は常に彼らの生活を教会にふさわしいように取り計らいをしなければならない。司祭の正当な妻は、まさに教会であり、ここから、教会法を気にかける人は、教会に叙任された人と関わり合いを持たなければならない。それがなければ、彼は致命的な罪で自らを完全に破滅させてしまうだろう。そして、地域の支配者は、それを気にかけ、書物が指示するように、それを采配し、判断しなければならない。誰も教会を傷つけ、悪を脅しつけてはならない。それにもかかわらず、教会の庇護は広い範囲で弱々しくなっており、古くからの権利は奪われ、道義にかなったことは剥ぎ取られてしまっている。教会のしもべは至るところで尊敬と庇護を奪われている。このことに思い至ることなく、この原因を作った人に災いあれ。というのも、神の教会の敵であり、神の教会の権利を傷つける人は、確かに神自身の敵となるからである。「教会の財産を不正に奪うことを試みる人は誰であれキリストの敵となる」（ヴェルチェリの司教アット）。そして聖グレゴリウスは恐ろしい口調でそれらのことについて話した。「もし誰かがキリストの教会を否定し、その聖域を侵害するなら、彼に呪いあれ。それについてすべての人が答えて言った。アーメン」。すべての人が熱心にこのことから自らを守ることは大いに必要である。それに神の友人は誰であれ、常に神の花嫁を悪用しないように気を配らなければならない。私たちすべては一人の神を愛し、敬意を払い、熱心にキリスト教を守り、あらゆる異教の習慣を全力で捨て去らなければならない。そして、私たちは王を忠実に支持しよう。そして友人は真の信仰で友人を支持しよう。

### 4.20　すべてのキリスト教徒について

すべてのキリスト教徒は、キリスト教を正しく守り、神の正義、世俗の権利に従い、彼らにふさわしい生活を行い、熱心に、彼らを賢明に思慮深く指示することができる人の指示に従い、自らの生活に秩序を与えなければならない。すべての人が何よりも

一人の神を愛し、断固として、私たちすべてを創造し、さらに、私たちを尊い代償で贖った人に対し信仰を持たなければならない。また、私たちは、どのようにして神の命令を正しく守り、私たちが洗礼を受けた時、私たち、そして、洗礼で私たちの庇護者となった人たちが約束したすべてのことを履行できるかを熱心に考えなければならない。次のことが洗礼を受ける時に約束することである。すなわち、常に悪魔を避け、熱心に彼の邪悪な教えを慎み、絶えず彼の不正すべてを捨て去り、永遠に彼の仲間に抵抗することである。その後すぐに何度も適切な信仰でまさに次のことを言明する。これからは、常に一人の神を信じ、常に何よりも彼を愛し、熱心に彼の教えに従い、正しく、彼自らの命令を守ることである。そして洗礼は、いわば、すべてのことばと約束の契りとなる。望むならそれを守りなさい。私の言うことは本当である。それから、天使が常に、どのようにして洗礼の後、すべての人が洗礼を望んだ時に約束したことを履行するか見守るのである。何度もそのことについて考えよう。熱心に、洗礼を受けた時に約束したことを責務として履行しよう。言動を正しくしよう。熱心に私たちの良心を清めよう。注意深く誓いを守ろう。頻繁に私たちが向かう偉大な裁きを考えよう。そして熱心に地獄の罪のたぎる炎から自らを守ろう。神がこの世で彼の意志を実行する人のために用意した栄光と喜びを自らのものとしよう。アーメン。

## 5.　結び

以上がウルフスタンによる *Institutes of Polity* の日本語訳である。一読して分かるように、ウルフスタンは聖俗を問わず、指導者の責務をこの作品で描いたのである。この作品に現代的意義を見い出すとすれば、やはり、第 2 節の「地上の王について」の記述が引用に値する。

> 愚かな王の場合、その指導のまずさにより、国民は一度ならず何度も哀れになる。賢明な王の場合、国民は幸福になり、繁栄し、勝利を得るのである。

この文はウルフスタン自身の経験が如実に反映されていると思われる。上で触れたように、ウルフスタンはエゼルレッドとクヌートの2人の王に仕えた。エゼルレッドはその思慮の無さで、[15] イングランドを亡国に導いた。それに対し、敬虔なキリスト教徒であるクヌートはエゼルレッドを打ち負かし、イングランド王として即位し、国を平定した。2011年3月11日に発生した東日本震災以降、私たちは国家の安寧秩序を保つためには、指導者の資質が非常に重要なことを認識している。ちょうど千年前、イングランドが危機に瀕している時、指導者のあるべき資質を記述したウルフスタンの *Institutes of Polity* の翻訳は、将来、震災復興の指導者となることを期待される高専生にとって有益な副読本となると信じる。

**謝辞**

本稿の誤りを丁寧に指摘していただいた査読者に感謝を申し上げます。言うまでもなく、本稿に残された誤りの全ては、筆者の責に帰する。

**注**

1) 笠井, 111-6 はプロジェクトの先駆けとなるものである。

2) 991 年のヴァイキングの攻撃はイングランド軍にに大打撃を与えた。この攻撃はモルドンの戦い(Battle of Maldon)として有名である。モルドンの戦いは韻文で歌われ、その韻文は古英語文学史上、重要な作品として見なされている。

3) ウルフスタンによる作品については, Bethurum, 24-49 を参照のこと。

4) ウルフスタンが作った「クヌートの法律」(Laws of Cnut) には、「キリスト教徒の王は神の怒りに対して復讐しなければならない」と、王が神の代理人として振る舞うべきという記述がある。Thorpe, 172.

5) 12 世紀におけるウルフスタンの受容については、Wilcox, 83-97 を参照のこと。

6) Ker, 215.

7) エドガー王(954-975)はエゼルレッドの父であり、彼の治世、イングランドは修道院を中心に文化が栄えたことで知られる。

8) コンスタンティヌウス帝(272-337)は、キリスト教を公認したローマ帝国の皇帝である。古英語期のイングランドにおいて、母ヘレナと共に名高い存在であった。

9) ニカイア公会議 (325 年)

10) コンスタンティノープル公会議（381 年）

11) エフェソス公会議 (431 年)

12) カルケドン公会議 (451 年)

13) ここで言及される「規則」とは、ベネディクト会派規則(the Benedictine Rule) のことである。

14) アンナは新約聖書の『ルカによる福音書』第 2 章 36 節から 38 節に登場する女預言者である。

15) エゼルレッドは Unready (無思慮、無作為)という epithet（あだ名)と共に呼ばれる。

## 参考文献

Bethurum, Dorothy. T*he Homilies of Wulfstan. Oxford: Clarendon Press*, 1957.

笠井哲 「『稲むらの火』における「防災」の思想 について」 『研究紀要』第 53 号 福島工業高等専門学校 2012. pp. 111-6.

Jost, Karl. *Die Institutes of Polity, Civil and Ecclesiastical. Ein Werk Erzbischof Wusftans von York.* Swiss Studies in English. Bern: Francke Verlag. 1959.

Ker, Neil R. *Catalogue of Manuscripts Containing Anglo-Saxon*, Oxford: Clarendon Press, 1957.

Swanton, Michael. *Anglo-Saxon Prose*. Totowa, N.J.: Rowman and Littlefield, 1975.

Thorpe, Benjamin. *Ancient Laws and Institutes of England: Comprising Laws Enacted Under the Anglo-Saxon Kings from Aethelbirht to Cnut, Google-E Books* (2013 年 9 月 17 日閲覧)

Wilcox, Jonathan, 'Wulfstan and the twelfth Century' In Mary Swan and Elaine M. Treharne, ed. *Rewriting Old English in the Twelfth Century*, Cambridge: Cambridge University Press, 2000.